

地域課題解決のための飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ

久世 均, 山田紗弥, 若林 萌, 山村菜摘 (岐阜女子大学)

1. はじめに

本学では、地域に根差し地域社会に貢献する大学として、本学独自で育ててきた「知的創造サイクル」を活用し、地域資源のデジタルアーカイブ化とその展開によって、伝統文化産業の活性化などの地域課題の解決や新しい文化を創造できる人材育成を行っている。

今回、飛騨高山の匠の技デジタルアーカイブによる伝統文化産業の振興について、デジタルアーカイブ研究とその利活用について研究を行ったので報告する。

2. 知的創造サイクルとデジタルアーカイブ

飛騨高山匠の技デジタルアーカイブは、文部科学省の私立大学研究ブランディング事業において収集・管理された飛騨高山匠の技に関する地域資料（79,166点）のデータで構成されている。

この飛騨高山の匠の技に関する総合的な地域文化の創造を進めるデジタルアーカイブは、「知的創造サイクル」を目的とした総合的なデジタルアーカイブとして捉えている。この飛騨高山匠の技デジタルアーカイブを、この「知的創造サイクル」に適用すると図1のような構成になる。

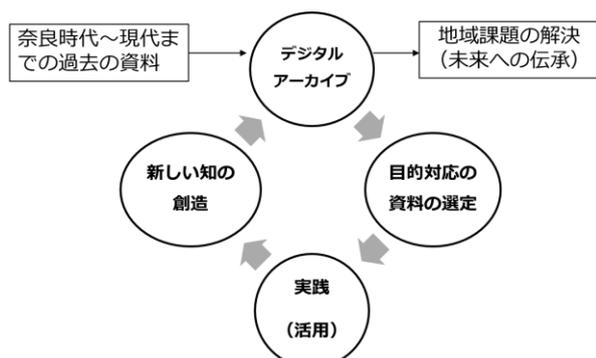


図1 知的創造サイクル

代表的な飛騨高山匠の技である木工家具は、伝統的な産業として国内および海外でも高級家具としてよく知られている。しかし、飛騨春慶塗や一位一刀彫りなどは、飛騨高山の匠の技の伝統的工芸品とされているものの多くの課題を抱えているのが実情である。そのため、匠の技を受け継ぐ後継者も不足しており、飛騨高山の匠の技やこころ

が次の世代に伝承することが困難となってきた。そこで、この「知的創造サイクル」を具体的に飛騨高山匠の技デジタルアーカイブに適用し、知的創造サイクルとしての地域資源デジタルアーカイブの開発を試みた。

このことにより、その地域資源データのオープン化と共に有効的に活用し、新たな知を創造する本学独自の「知的創造サイクル」を生成し、この地域資源を生かして地域課題を探索し、深化させ課題の本質を探り実践的な解決方法を導き出す手法を確立することが可能になる。

3. 飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ

知識基盤社会においては、様々な正確で良質な知識の集合体の整備が重要であるが、知識循環型社会の実現においては、様々な知的資源を集積した知識の集合体をどのように利活用するかが重要になる。また、様々な利用者が活用するためには結果よりもプロセス情報が必要となる。様々な意思決定結果より、意思決定のプロセスのほうが重要となる。

そのために、今回の飛騨高山匠の技デジタルアーカイブでは、一位一刀彫りや飛騨春慶塗の製作過程等の様々なプロセスを中心にデジタルアーカイブしている。このように、デジタルアーカイブする対象については、知識循環型社会では知識基盤社会とは異なり、利活用することにより、新たな知識を創造する知識循環型社会に対応した新たなデジタルアーカイブを開発する必要がある。

飛騨高山匠の技の約8万点の地域資源をデータベース化する際に、次のWeb公開型と非公開型のデータベースをそれぞれ構築し管理している。

(1) Web 公開型データベース

Web 公開型データベースでは、地域資源デジタルアーカイブを、①名称②アイキャッチ画像③説明④静止画資料⑤関係資料⑥地図情報⑦動画資料で構成し、Webで公開している。

飛騨高山匠の技デジタルアーカイブでは、様々な資料をデジタルアーカイブするため、著作権なども含めて公開できないものもある。しかし、今

デジタルアーカイブしておかなければ紛失したり廃棄となったりする可能性もあるため様々な資料を、デジタルに変換して保管している。Web 公開型データベースでは、その中でも飛騨高山匠の技デジタルアーカイブの中で公開してもよいもの、並びに公開の許可が得られたものを公開している。

(2) 非公開長期保管型データベース

非公開長期保管型データベースは、長期保存・管理を目的とするデータベースで、映像は高品位な映像はそのまま保存し、紙メディアについては、できるだけ高品位にスキャンして保存している。このデータベースの機能には、OCR 機能があるため、データを文字で検索でき、メタデータをジャケット単位に付記することが可能になっている。

また、非公開型となっているため、著作権や肖像権・プライバシー等を気にせず、保存が必要と思われる情報を、ここに短期に保管する Item Pool 機能と長期保管の Item Bank 機能を有するデータベースに保管・管理している。

特に、動画資料や紙資料も一体化して保管し、統合化した構成としているのが特色である。

また、紙資料はストーリー性があることが多く、単体の画像データと紙メディアを統合することにより、より利活用が容易になる。

紙メディアは、直接資料を高品位スキャナでデジタル化し、非公開長期保管型データベースに保管している。この場合についても高品位な画像で登録することにより、拡大しても鮮明に見ることが可能になっている。

最終的なデータは、オプティカルディスク・アーカイブとして保存管理している。オプティカルディスク・アーカイブは、デジタルデータの長期保存（アーカイブ）を目的とした、大容量光ディスクストレージシステムで、保存寿命は100年以上となる。

3. デジタルサイネージへの展開

前述のように飛騨高山匠の技データベースでは、約8万点の情報を非公開長期保存型データベースに保管している。この地域資源デジタルアーカイブを交通・観光に利活用するために、デジタルサイネージへの展開を考えた。

デジタルサイネージは、一般に「サイネージ」と呼ばれることもあるが、「電子看板」、「電子広告」などとも呼ばれている。主な用途としては、紙に

代わる新しい情報伝達媒体として利用されており、画像や動画などデジタルコンテンツとディスプレイを組み合わせて、紙のポスターやお知らせを置き換えて使われることが多い。今回、飛騨高山匠の技デジタルアーカイブした約8万点の情報から3本の動画コンテンツを作成し、現在中部国際空港で展示をしている。

このようなデジタルサイネージを地域文化の広報のために活用することは地域活性化並びに伝統文化の発展としても効果があり、地域資源デジタルアーカイブの新しい利活用として可能性がある。ここで、成果物の還元として、また、地域課題の解決として効果が期待できるのがデジタルサイネージである。

4. 飛騨高山匠の技のガイドブックの作成

飛騨高山匠の技デジタルアーカイブのガイドブックとして、紙メディアとWeb公開型デジタルアーカイブとQRコードで連携した冊子を作成している。この冊子は、観光や教育用として活用する。

5. . 地域課題の解決への適応

本学では、デジタルアーカイブを有効的に活用し、新たな知を創造する本学独自の「知的創造サイクル」を生かして地域課題を探索し、深化させ課題の本質を探り実践的な解決方法を導き出す人材を養成する大学に変革することを目指している。

今後、継続して地域の課題を抽出することから始め、大学の知識を集約して地域資源デジタルアーカイブを構築し、これらのデジタルアーカイブを有効的に活用し、地域の課題を実践的な課題解決の方法を導き出す人材養成のための、今後も継続して地域資源のデジタルアーカイブの構築をする予定である。

参考文献

- (1)久世均:知識循環型社会とデジタルアーカイブ～デジタルアーカイブを活用して地域課題の解決を～, 地域開発, 2018. 春 Vol. 625(2018年6月15日発行)
- (2)久世均:地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための実践的研究【1】～知的創造サイクルによる地域課題の解決手法の開発～, デジタルアーカイブ研究報告, 2019. Vol. 2, 2020. 3. 31 他